

## 10 月第 1 週の礼拝説教

■日 時：2024 年 10 月 6 日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第 21 主日礼拝

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：ヨハネによる福音書 11 章 28～44 節（P188）

■説教題：「出て来なさい」

■讃美歌：7（ほめたたえよ、力強き主を。）  
402（いともとうとき イエスの恵み、）

本日の聖書箇所は、ヨハネ福音書 11 章の後半になります。いわゆる「ラザロの復活」の出来事が記されている場面ですので、召天者記念礼拝などで取り上げられることも多い箇所です。先週、11 章の 1 節から 16 節の「ラザロの死」と見出しのついている箇所を取り上げました時に、5 節で「イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。」と記されているほどに、主イエスと彼らの間には親密な関係があったことをお話ししました。本日の箇所は、マルタとマリアの姉妹は兄弟の死による深い悲しみ嘆きの中にいましたが、マルタはそこから気丈に立ち上がり、主イエスを迎えに行き悲しみの思いを訴えたのに対して、マリアは悲しみにうちひしがれて家の中に座り立ち上がることもできずにいた、という場面から始まっています。28 節で、マルタは家に帰ってマリアに、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちしました。29 節に「マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った」と記されています。この「立ち上がる」という言葉は「復活する」という意味でもあります。おそらく、マリアが立ち上がることができたのは、悲しみの中に苦しんでいるあなたのところに来て下さっている方がいる、そして、その方があなたを呼んでおられ、あなたと出会おうとしておられる、ということを知ったからでしょう。その言葉によって、絶望して身動きできなくなっているマリアが立ち上がり、動き始めたのです。それは、新しい出来事が始まり始めたということでもあります。本日もこれから、主イエスが死んでいたラザロを生き返らせるという、ヨハネによる福音書における第七番目のしるしでもあり、最後のしるしでもある出来事をご一緒に読んでいくのですが、私はその直前に記されているこのマリアの「立ち上がり」ということも、実は主イエスのなされた奇跡ではないかと考えているのです。なぜなら、人が絶望して身動きができなくなっている状況というのは、深い意味でのその人の「死」ということではないかと思われ、そこから立ち上がるというのは今一度「生」へと立ち帰ることになると思うからです。ヨハネによる福音書の著者の見ている主イエスのみ業とは、そのような意味で、私たちに深い慰めを与えてくれるものなのです。

さて、主イエスのもとに来たマリアは、その足もとにひれ伏して「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言いました。マルタも 21 節で全く同じことを言ったことが記されていました。彼女たちは、主イエスが病を癒す力を持っておられる神の子、救い主であることを信じているのです。だからこそ、主イエスが間に合うように来て下さらずにラザロが死んでしまったことへの嘆きも深いのです。この箇所を読みますと、主イエスを信じている者にも苦しみや悲しみがあふれることにはっきりと記しています。そして、主イエスを救い主と信じている信仰者だけ

からこそ、苦しみや悲しみが襲ってきたときに、「なぜ、私にこのようなことが降りかかってくるのか」「どうして、主イエスは共にここにいてくださらないのか」という嘆きが強くなるのかもしれませんが。しかし、33節に「イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て」と記されていることに注目したいと思います。嘆き悲しみ泣いている彼らを主イエスが見ているという普通の光景ではないかと、スルーしてしまうと、ヨハネによる福音書の著者の語る救いもスルーしてしまうことになるかもしれませんが。主イエスは、ご自身のところにやって来て、悲しみ嘆き泣いている彼らの姿を「見て」下さっているのです。その主イエスが注がれるまなざしから、主イエスによる救いのみ業が始まっているのではないのでしょうか。主イエスは、「心に憤りを覚え、興奮して」と記されています。この箇所は、新しい聖書協会共同訳では「憤りを覚え、心を騒がせて」と訳されています。少し先の14章の1節の主イエスのみ言葉「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」が思い浮かびます。やがて、十字架の出来事を見据えて弟子たちにそのように別れの言葉を語られる主イエスですが、本日の箇所ではご自身が心を騒がせておられるのです。主イエスの心に激しい「憤り」が起っているのです。ある方はこの箇所です。ある方はこの箇所です。「皆がラザロの死に絶望し、涙している中、主イエスは『憤り』をもって墓に向かわれる。死の支配の現実に、主イエスは立ち向かっておられるのである。」。しかしその一方で、主「イエスは涙を流された。」と35節では記されています。ここから私たちは、主イエスは徹底的に私たちに共感して下さり、寄り添ってくださるお方であって、私たちの悲しみや嘆きを深く受けとめてくださる隣人として涙を流しておられる、という姿を見ることができます。そこからは、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」という真実の隣人として、主イエスは私たちの傍らに立たれるということをも知ることができます。そのような主イエスの二つの側面が、ここでは何気なく記されているのです。しかし、ヨハネによる福音書の著者は、共に涙を流していたはずのユダヤ人たちの中には、主イエスが涙を流される様子を身近に見ていて、主イエスに対して冷めた見方をしている者がいたことを明らかにしています。それは、共に嘆き泣いてくださる方ではあるし、盲人の目を開けるという奇跡を行った方ではあるけれども、人間の「死」そのものに関してはやはり手出しはできなかつたのだ、という見方です。そのことは、今、この箇所を共に読んでいる私たちの心の中にある思いでもあることを、知らされます。

38節は「イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた」と書き出されています。先ほど見て来た33節にも「イエスは心に憤りを覚え、興奮して言われた」とありました。主イエスの憤りの対象は、人の不信仰に対して、ということも考えられますが、それよりも、人を悲しませている力、死の力に対して、と考えるほうが良いのではないかと、思います。私たちは誰一人として、死の力から逃れることができません。そのような意味では、「死」は圧倒的な力をもって私たちに威圧しているのです。その力に対して、心に強い憤りをもって、主イエスは墓の前に立たれ、「その石を取り除けなさい」と言われました。当時の墓は、ほら穴のようなどころであったようですが、そこに大きな石のふたをしました。死臭が外に洩れるのをふせぐためであったと思われます。マルタは、40節で「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言ったのは、その場にいた者たちの気持ちを代弁したのでしょう。人間の体は死んだその時から腐敗が始まっていきますから、四日も経つと、もう異様なにおいが立ち込めていたと思われます。ですから、マルタの言葉には、「お墓を開いて、一体何をなさろうと言うのですか」という

非難にも似た思いが表れています。彼女は、この直前にイエス・キリストへの信仰を明らかにしたばかりであるにもかかわらず、これから主イエスがなさろうとしていることがわからないのです。そこには、誰でも愛する人の体が死臭を放つには耐え難い気持ちを抱くものだという現実が語られています。しかし主イエスは、そのような気持ちに逆らうように「石を取り除けなさい」と命じられました。さらに主イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と続けられました。人々は、恐れもあり半信半疑で石を取り除けますと、主イエスは天を仰いで、「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています」と祈られました。ところで、主イエスはマタイによる福音書 6 章 8 節で、「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存知なのだ」と言われました。「それならば、祈る必要などないのではないかと、私たちは考えてしまいます。しかし、主なる神がそのようなお方であるからこそ、私たちはどんなことでも率直に祈ることが大切なのではないのでしょうか。ここでの主イエスは、「わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」と、主なる神に祈る理由を語られました。そのこともまた、その場にいる人々の思いを見抜いて、丁寧に説明されたと言えるでしょう。

43 節では、主イエスは「『ラザロ、出て来なさい』と大声で叫ばれた。」と記されています。その声が、深く陰府で眠っているラザロに届くように、そしてそこにいたすべての人の心の奥底に届くように、大声で叫ばれたのです。その声には、主イエスの心の憤りが込められていました。またマリアに共感する涙が込められていました。そして、その声は、いつの間にか深く眠ってしまっている私たち一人一人に対しても、「出て来なさい」と呼びかけているのではないのでしょうか。この箇所でのラザロは、「手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた」とあるように、埋葬されたままの姿で墓から出て来ました。主イエスは「ほどいてやって、行かせなさい」とおっしゃいました。主イエスによって新しい命をいただき生き始めるにあたって、ラザロは埋葬時のいわば死に装束である布を、顔と手足からほどいてもらわなければなりませんでした。私たちもまた、主イエスの「出て来なさい」との呼びかけに答えて、新しい命へと歩み出すときに、私たちを眠りの中に閉じ込めていた様々なしがらみをほどいてもらわなければなりません。それが、主イエスの十字架と復活によって生まれた教会の働きであり、また、そこに集っている一人一人の祈りの力であると信じてまいりましょう。

※立川教会では、11月17日(日)午後1時から、礼拝堂を会場にして、カンテレ(フィンランドの伝統楽器)の演奏(はぎた雅子氏)とそれにまつわるお話(橋本ライヤ姉)の会が開かれます。入場は無料です。どうぞ、どなたでもご出席ください。